

デリーの
床屋さんにて

太田仁志

インドのデリーに赴任してしばらくたち、歩いて一五分ほどのマーケットにあつた少し小洒落た感じのする床屋さんにはじめて行ったときのこと、散髪だけお願いすると、「フェイシャル、どうですか？」とお店のお兄さんが聞いてきた。「フェイシャルって何ですか」とたずね終わるか終わらないかのうちに、お兄さんはありえないほどの字顔で「あなたの顔はとても汚い」と素直すぎる一言。「だからフェイシャルって何？」と聞きなおすと、おもむろにメニュー表を手渡された。要は美白のことらしい。さっと見たところ、トップメニューには「スーパー・ブリーチ」（超・漂白）とある。値段も一番高く、たしか一〇〇〇ルピー以上だった。そのお店は散髪が二〇〇ルピーだったので、かなりの値段である。これなんかお願いしたらまっ白になっちゃうんじゃない？ という筆者をお兄さんは無視して「髪も汚い」とつぶやき、洗髪台につれて行かれた。念のためにいっておくが、この日のように風の強い日は一〇分ちよつとも外を歩けば、髪は砂でざらざらになってしまうのがデリーである。

その日は散髪だけで帰ってきたが、それから「スーパー・ブリーチ」がなんとなく気になってきた。一九九〇年代末にバンガロールに留学していた時に、キャンパスの学生寮の一室に集まった当時としては珍しかった飲み会に、三〇歳代

中盤の健康的な褐色肌の男の友人が、なぜか顔にベビーパウダーよろしく粉か何かをうつすらと白ぬりして出てきたのを記憶している。今回デリーでは、とあるインド人女性が「日本の女性はみんなきれいな」と、その理由に日本人女性の色の白さを挙げていた。テレビのコマーシャルでも、ボリウッド映画の有名俳優を起用した男性用の美白製品の宣伝はかなり頻繁に目にする。インドでは筆者が思っていた以上に美白意識が強いようだ。

次からの散髪は近所の街角のお店と前から決めていたのだが、しかし、ないと思っていたお世辞にもきれいなとはいえないそのお店にも、フェイシャルがあつた。三〇ルピーでひとつおりの散髪がすむと、お店のおじさんはすかさずフェイシャルはどうだと聞いてくる。ここでも美白なんだ、と感心しながらオプシオンを聞くと、任せておけ、とおじさんのなすがままに一二〇ルピーで初フェイシャル体験がはじまった。今となってはよく覚えていないが、顔を霧吹きでぬらしたり、固形石鹸のような半透明の何かを塗りたくったり、スチームを顔に浴びせたり、クリームを塗ったり、マッサージをしたりと、所要時間は散髪と同じくらいの一五分ほど。そして最後にタオルで顔を拭いてくれるのだが、そのタオルがおそらくは、少なくともその日一日お客さんに使い回しをしてきただろう、一見してそれとわかるものだった。こうして心にダメージを受け、筆者の最初で最後のインド・フェイシャル体験は幕を閉じた。

その後思ったのだが、ある程度の所得層を対象とする理髪店・美容店では提供するサービスも少し多様になるようだ。赴任二年目に市内で転居した当初、地理がわからずようやく見つけた少し高

そうなお店をのぞいてみると、お金持ちマダムが頭にタオルを巻かれ、気持ちよさそうにゆったりとしている。その伸ばした足元にはお店の制服を着た若いお兄さんがシャカシャカシャカシャカとやすりでマダムのかかとの角質層を勢いよくケアしている。同時にお姉さんがもう一人、全身をケープで覆われたマダムのネイルの手入れをしていて、その三人の構図はさながら全身フルサービスという感すらする壮観なものだった。かかとのケアは別のお店で男性客に施しているのを見たこともある。日本の普通の床屋さんでは見かけない、インドならではのサービスではないかと思う（ほかの国でもあるかもしれない）。

インドと日本のサービスの違いに、法律や資格、また慣習の違いの関連も可能性としては指摘できるかもしれない。日本では理髪店関連の仕事には理容師法やら美容師法やらがあり、また国家資格も必要となる。垣根を越えた参入に制約なしとはいえないが、インドではどうなのだろう。デリーでは理髪店はライセンス制だが、道端に露店の床屋を今も時々目にするので、もしほかに規制等があつても、それらの履行は緩やかなはずだ。ただし筆者が赴任中に行つたどこのお店でも、剃刀の刃の交換はその都度必ず筆者の注意をひいて目の前で行つていたので、ライセンス制と関連してか、何らかの行政指導はなされているように思う。また、床屋という職業はインドでは伝統的にはカーストとも関連する。フェイシャルなどのサービスが街角の小さなお店でも出されているところを見ると、どこかで講習などを提供する場もありそうだ。インドの床屋さんは思ひのほか奥が深いのかも知れない。